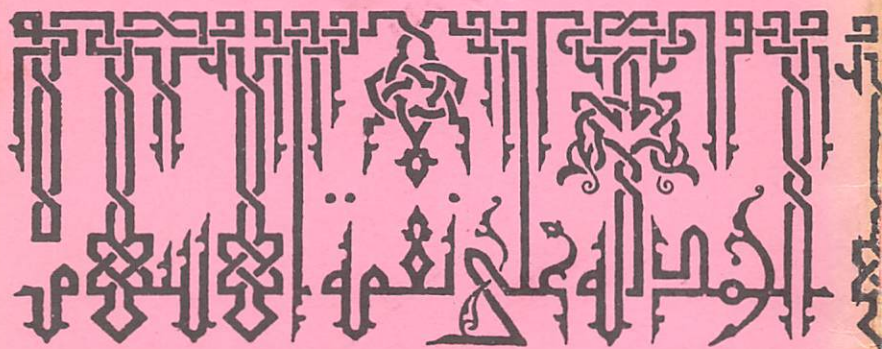


イスラームの休日と儀式

الأعياد والمناسبات الإسلامية

イスラーム入門シリーズ

No. 9



宗教法人

イスラミックセンター・ジャパン

ISLAMIC CENTER, JAPAN

イスラームの休日と儀式

الأعياد و
المناسبات
الإسلامية

イスラーム入門シリーズ

No. 9



宗教法人
イスラミックセンター・ジャパン
ISLAMIC CENTER, JAPAN

イスラームの休日と儀式

目次

一、	イスラーム暦	5
二、	イスラーム教徒の休日	7
	1 金曜日	8
	2 スンナ(預言者の慣行)にもとづく祭事	11
	a イードゥル・フィトゥル	11
	―断食明けの祭―	
	b イードゥル・アドハ	11
	―犠牲祭―	
	3 史実にもとづく祭事	14
	a ヒジラの日	14
	―メッカからメディーナへの聖遷―	

	三、		
	イスラームの儀式	21
1	婚姻契約（アクト・ニカー）	21
2	出生	25
3	死亡	26
	— 預言者昇天の日		
	d ライラトウル・イスラー・ワル・ミアラージュ	19
	— みいつの夜		
	c ライラトウル・カドウル	16
	— 預言者生誕の日		
	b ミラドウンナビ	15

仁愛慈悲のアッラーのみ名によって

イスラームの休日と儀式

一、イスラーム暦

イスラーム暦は、聖預言者ムハammad（かれの上に平安あれ）の、メッカからメディーナへのヒジラ（聖遷）の年をその紀元元年としている。預言者のメディーナへの脱出は、イスラーム暦ラビウルアッワル（三月）の八日であった。このイスラーム暦の設定は、ヒジラから十六年たったとき、アリーに進言によって第二代カリフ、オマールの時に採用された。それ以前にはアラビアには特定の暦はなかったのである。ヒジラの日は、実際にはラビウルアッワル（三月）の八日であったが、一般にはイスラーム暦ムハッラム（一月）一日をイスラーム教徒はヒジラ（メディーナへの聖遷）の日として祝っている。

イスラーム暦は、地球をまわる月の軌道の周期をもとにしている。一ヶ月は、新月の日から次の新月までで、その月によっては一日半の違いがあり（月の周期の平均は、二十九日と十二時間四十分）月の運行をもとにした一ヶ月は二十九日と三十日からなっている。したがって、同じ月でも、例えば断食の月ラマダーン（九月）は、年によって二十九日か三十日である。一年は十二ヶ月であるから、陰暦の一年の総日数は、年によって三五三日、三五四日または三五五日である。陰暦の日付は太陽暦とは少しずかずれていき、約三十二年毎に元に戻るようになっている。

イスラーム暦の十二ヶ月は次のとおりである。

- | | | | |
|------|---------|------|----------|
| 第一月 | ムハッラム | 第二月 | サファール |
| 第三月 | ラビウル | 第四月 | ラビウサーニ |
| 第五月 | ジャマダル | 第六月 | ジュマダルサーニ |
| 第七月 | ラジャブ | 第八月 | シャバーン |
| 第九月 | ラマダーン | 第十月 | シャワール |
| 第十一月 | ズル・カイダー | 第十二月 | ズル・ヒッジャー |

一日の変わりめは、夜中の十二時ではなく、夕方の日没時とされている。したがって、たとえばラジャブ（第七月）二十七日の夜は、実は二十六日の日没から二十七日の夜明けまでということになる。

二、イスラーム教徒の休日

1 毎週の金曜日は、イスラーム教徒にとっては特別の日である。それはイスラーム教徒にとって義務（ファルド）としての集団礼拝の日であり、これについては後の節で詳しく説明する。

2 預言者のいわれたこと、すなわちスナナで定められている祭日は次の二つである。

(a) イードゥル・フィットル（断食明けの祭）、シャワール（第十月）一日

(b) イードゥル・アドハ（犠牲祭）、ズル・ヒッジジャー（第十二月）十日

3 イスラーム教徒の祝っているこれ以外の祭日は、次の通りであるが、これはイスラームの歴史の中の出来事をもとにしたもので、クルアーンに述べられている教徒としてのつとめ（ファルド）でもなく、預言者の慣行としてのスナナでもない。

a、ヒジラの日（預言者のメディーナへの聖遷の日）

第一月（ムハッラム）一日

b、ミラドウンナビ（預言者生誕の日）

第三月（ラビウルアッワル）の十二日

c、ライラトゥル・カドゥル（みいつの夜）

第九月（ラマダーン）の最後の十日間のうちの奇数日

d、ライラトウル・イスラー・ワル・ミアラージュ（預言者昇天の日）

第七月（ラジャブ）二十七日

1 金曜日（ジュマア）

金曜日（ジュマア）は、定められた集団礼拝（サラート）の日で、この日はすべてのイスラーム教徒にとって宗教的・社会的に特別の意義をもっている。本来は、毎日の礼拝のつとめも集団で行うのが良いとされているが、これは特に要求されていることではない。しかし、イスラーム教徒の成年男子はすべて、金曜日の礼拝を集団で行うことが義務と定められている。女性の場合は、本人の気持次第とされている。

ジュマアの礼拝の準備として、人びとは朝のうちにシャワーを浴びるか、沐浴をして身を清め、清潔な衣服を身につけて、ネギやニンニクのように不快な臭気を残す食物をとらない事になっている。る。

イスラーム諸国では、金曜日の礼拝はモスクで行われる。しかし、モスクの数がきわめて少いと

ころでは、信者の集り易い適当な場所を礼拝の目的に使うのがよい。一つの共同社会の中に住むイスラーム教徒にとっては、金曜日の礼拝を行うために、何か一定の恒久的施設を定めておくことが望まれる。

金曜日の礼拝は他のすべての集団礼拝の場合と同様に、選ばれたイマームが指導する。礼拝の前に、イマームが参集者にホトバ（説教）を行うが、これは神へのつとめの一つであって、その間は勝手に礼拝したり喋ったりすることなく、イマームの言葉に真剣に耳をかたむけなくてはならないとされている。イマームの説教は、短い間隔をおいて二つに分けて行われる。最近起ったでき事、すなわち国の内外を問わず、イスラーム教徒のかかえているいろいろの問題や、クルアーンの章節やハディースの注釈などを、その話題にするのがよいとされている。金曜日の説教は、イスラーム教徒の責任と義務について説き、世の中の動きを知り、また信者同志の精神的連帯を深めるための手段として現在まで行われており、そして今後もそうでなくてはならない。またイマームの説教は、^{イッラー}神への讚美、預言者ムハンマド（かれの上に平安あれ）とかれの教友たちへの祝福、およびすべてのイスラーム教徒への祈りに終始しなくてはならない。

金曜日は、イスラーム教徒の集団礼拝の日であるから、ユダヤ教やキリスト教の安息日や日曜日によく似ているように見えるが、実際には同じではない。前記の二つの宗教で安息日を定めた理由

は、創造主であられる神が天地創造のため六日間「働き」、七日目には「休みをとった」ということから、人々も創造主と同じように、七日毎に一日「安息」をとるべきだという考えをもとにしたものである。（旧約聖書、出エジプト記第二十章第八―十一節参照）この考え方はイスラームのそれとは基本的に相反している。というのは、全能の神アッラーは、自らの天地創造の仕事に疲れ、休息を必要としたということはまったくないからである。イスラーム教徒は、ジュマア（金曜）の礼拝の日でも、普通の日と同じように、自分の仕事に励んでもよいのである。

アッラーは、クルアーンの中で次の通り述べておられる。

なんじら信仰するものよ

集会の日の礼拝に

呼び出しが唱えられたならば

アッラーを念ずることに真剣に急ぎ

商売からはなれよ。

もしなんじらにわかっているならば

それがなんじらのために最も良い。

礼拝が終ったならば

なんじらは大地に拡がり

アッラーの恩典を求めよ

アッラーをたたえ、多く唱念しまつれ

おそらくなんじらは栄えるであらう。

(第六二集礼章九—十節)

2 スンナに基づく祭事

a、イードゥル・フィットゥル(断食明けの祭)

b、イードゥル・アドハ(犠牲祭)

「イード」はアラビア語で、「幸福や歓びを祝う」という意味で、これにはイードゥル・フィットゥルとイードゥル・アドハの二つがあり、前者は断食月ラマダーンの終わった翌日の第十月一日を断食明けとして祝い、後者はハッジ(大巡礼)の行事が終った翌日の、ズル・ヒジャール(第十二月)の十日を祝う犠牲祭である。

預言者ムハンマド（かれの上に平安あれ）がメッカを脱出してメディーナへ着いたとき、かれは街の人びとが余りにも多くの祭事を祝っている事を知り、異教徒のこれらの祭事をとりやめ、アッラーが定めた、イスラーム教徒にとっての二つの祭事、すなわち二つのイードだけを祝うよう、イスラーム教徒に告げた。この二つのイードは、すべてのイスラーム教徒個人個人、およびイスラーム社会全体のための感謝と祝福の日である。イードゥル・フィトルは、断食のつとめが終ったことを、そしてイードゥル・アドハは巡礼のつとめが終ったことを祝うものであり、断食と巡礼の二つは唯一の神アッラーに仕えるわれわれイスラーム教徒の重要なつとめである。（断食と巡礼のくわしいことは、ウッセンター発行のパンフレッド、イスラーム入門シリーズを参照されたい）

「イード」は飲びとしあわせの場であるけれど、軽率に振舞ったり、食べすぎたりして快楽の奴隷となってしまうてはならない。「イード」にわれわれイスラーム教徒の感じる飲びとは、充足感にある。それは規律・信心、そして集団礼拝についての神のみことばを守ったという精神的よろこびである。

二つの「イード」の日には、イスラーム教徒はまず神への礼拝を行い、そして困窮者への喜捨、友人縁者の訪問、贈物の交換などをして一口を過すのである。「イード」の精神は、平和と寛容の精神にあり、この日には人びとは、これまで隣人に抱いていた怨恨や悪意をすべて忘れて、この日

を友愛の精神で、新しい人間関係を培う門出としなくてはならない。

「イード」の日の礼拝は、日の出から正午までの間に行い、ジュマアの礼拝と同じように集団で行うものとされている。しかし、女性の場合は、もし希むなら家庭で礼拝してもよく、いづれの場合でも礼拝の前には必ず沐浴して身を清め、清潔な衣服を身につけなくてはならない。「イード」の礼拝（入門シリーズ「サラート」参照）のあと金曜日（断食明けの祭）の礼拝と同じように、イマームの説教が二回に分けて行われる。イードゥル・フィットル（断食明けの祭）の説教では、イマームは参集者に対して、断食明けの寄附金（サダカ・アルフィットゥル）のつとめを果すように呼びかけ、イードゥル・アドハ（犠牲祭）のときは、犠牲のつとめを人びとに強く説くことになっている。「イード」の日とその次の二日間、すなわちズル・ヒッジャー（第十二月）の十日、十一日、十二日には、一族につき山羊か羊一頭を、そして七家族につき牛一頭を犠牲に捧げる。肉の三分の一は自分たちで用い、残りの三分の二は生肉のまま貧しい人々に分けたり、友人や縁者への贈物とする。

3 史実にもとづく祭事

a、ヒジラの日（預言者ムハンマド、メディーナ聖遷の日）

ヒジラは、イスラーム史上もっとも意義深いでき事であり、この日をもって、イスラーム教の成功と拡大への出発を画するものである。メッカでは、イスラーム教徒はひどい迫害を受け、自らの生命財産の安全さえ危機にさらされ、自分たちの集会を持ったり、宗教的行事は公然と行えず、社会的・政治的な影響力を持つことはとうていできなかった。かれらがメッカで受けたこのような試練と苦難は、神の許しのもとにメディーナへ脱出したことによって、すべて過去のものとなった。

メディーナの人びとは、イスラーム教を受け入れ、預言者（かれの上に平安あれ）をかれらの指導者として迎え入れた。軍事的な攻撃は依然として繰り返し加えられたけれども、ひとまずメッカの人間たちの継続的な迫害から逃れ、かれらイスラーム教徒たちは一つの宗教社会を形成し、神のみに従って行動し、宗教を實踐、布教し、次第にその力を結集して行った。預言者のヒジラ（メディーナへの聖遷）を記念して、第二代カリフのオマールは、預言者の教友たちと相談し、ヒジラ暦のムハッラム（第一月）一日（西暦六二二年七月十五日）をイスラーム暦の一月一日とすることにした。

ヒジラの日には、人びとは互いに挨拶を交し、預言者とその教友たちの話をして、その日を祝うのである。

b、ミラドゥンナビ（預言者生誕の日）

ミラドゥンナビは、聖預言者（かれの上に平安あれ）の誕生日の祝いである。ムハンマドはヒジラ（聖遷）の五四年前の三月十三日（西暦五七〇年八月二十日）の早朝に、この世に生を受けた。ムハンマドは「最後の預言者」（聖クルアーン三三章四〇節）であり、クルアーンの受託者、人類への最後にして完璧な、神の使徒である。預言者の行なったことは、すべての時代と地域を通して、すべての人が守るべき模範である。ムハンマドを通して、神は真実の教えイスラームを完成し、人類に対する神の目的を強調した。聖預言者は聖クルアーン二十章一〇七節に述べてあるとおり、「よろずの世への慈悲」だったのである。

各地のイスラーム教徒は、この日を心から祝福する。繰り返していうが、この日は軽はずみに浮かれた行動をとったり快楽を追い求めるためのものではなく、内面的な歓びや幸福を求めるためのものである。この日には、全イスラーム世界で集会が開かれ拾人びとは預言者の誕生、少年期、成年期、かれの宗教法話、人となり、冷酷な反対者からの受難とかれらに対する寛容さ、あらゆる局面での忍耐心、メディーナへの聖遷、人との接し方、戦場でのその勇敢な指揮ぶり、人間の魂を超越した、神の恩恵による最終的な勝利、などについて語り合うのである。

またイスラーム暦の三月十二日が預言者の出生の日として祝福されるだけでなく、ラビウルアッワル（三月）の一個月間が預言者の「誕生月」として祝福されることになっている。

まことにアツラーと諸天使は

聖預言者を祝福する。

信仰する者たちよ

なんじらもかれを祝福し

最大の敬意を払ってあいさつせよ。

(第三三連盟章五六節)

c、ライラトゥル・カドウル(みいつの夜)

預言者ムハンマド(かれの上に平安あれ)が、天使ガブリエルを通じてアツラーの啓示を最初に受けた夜は、「ライラトゥル・カドウル」(みいつの夜)とクルアーンに書かれている。その時ムハンマドは四十才であった。天使ガブリエルが預言者に伝えた最初の言葉は次の通りである。

読め、創造したまえる方

なんじの主のみ名によって

一縷血から、人間をつくりたもうた。

読め、なんじの主は

こよなく尊貴であらせられ

筆によって教えたもう方

何も知らなかった人間に

教えたまえる方であられる。

(第九六凝血章一―五節)

預言者ムハンマドへのクルアーンの伝達は、二十三年間にわたって行われ、かれの死の直前に終っている。最後の啓示はクルアーンの第五章第四節である。

ラマダーン月(第九月)のどの夜がライラトゥル・カドゥル(みいつの夜)であるかを確かめる方法はないけれども、ハディース(預言者の言行録)には、ラマダーン月の最後の十日間の奇数日の夜であると記されている。いくつかのイスラーム教国では、第九月二十七日の夜―正確には二十六日の日没から二十七日の夜明けまで―を「ライラトゥル・カドゥル(みいつの夜)」として祝っている。「みいつの夜」については、クルアーンに次のような言葉がみられる。

まことにわれはみいつの夜に

このクルアーンを啓示した。

みいつの夜が何であるかを

なんじに理解させるものは何か。

みいつの夜は千月よりもまさる。

その夜、諸天使と聖霊ガブリエルが

主の許しのもとに

よろずの神命をもたらして下る。

暁の明けるまで、それは平安である。

(第九七みいつ章一―五節)

「みいつの夜」の何時間かを、人びとはクルアーンを読み、規定の礼拝や追加礼拝、そして神への祈りのために費やさねばならない。たしかにラマダーン月の一ヶ月にわたって、人びとは断食、礼拝、慈善と善行に専念する。(当センター発行のパンフレット「断食」を参照のこと) 預言者の妻アイーシャは、神の使徒ムハンマドは、ラマダーン月の最後の十日間は、神に仕えるために、ほ

かの口々以上に努力されたと伝えていゝる。

d、預言者昇天の日（ライラットウルイスラ・ワルミラージ）

聖預言者（かれの上に平安あれ）が神の使徒となつてから十年目のラジャブ（七月）二十七日の夜、かれは肉体的にも精神的にも最もすぐれた洞察力をもつて、いくつかの神のみしるしを目にした。

神の栄光をたたえまつる

そのしもべ（ムハンマド）を

聖なる神殿（カアバ）から、

その四圍をわれが祝福した

至達の聖靈拝殿（エルサレムのソロモン神殿の遺跡）へ夜間旅をさせた。

わが種々のしるしを

かれ（ムハンマド）に見せるためである。

まことに神こそは

全聴者・全視者であられる。

(第十七イサラエル章第一節)

この表明によって、神は預言者を、人間として到達しうる最高の精神的高みにまでひき上げられた。この夜、一日五回の礼拝（サラート）が神によって命じられたのである。「みいつの夜」、イスラーム教徒はクルアーンを読み、礼拝を繰り返し行い、この夜を祝ってすすすのである。

三、イスラームの儀式

1 婚姻契約（アクト・ニカー）

イスラームの教えでは、イスラーム教徒は結婚し、相互の愛情、協調そして尊敬の念をもって共に生活し、子供を生んで敬虔なイスラーム教徒に育て上げるよう、人びとにすすめている。イスラームでいう結婚とは、一つの市民契約、すなわち神と人の前で誓った二人の人間の相互協約であって、そこには何ら神秘的とか聖礼典的な意味は含まれていない。

イスラームでは、職業的な僧職は存在しないので、もちろん結婚そのものの形をととのえるためには必要なことではあるが、新郎と新婦の間を司どる専門職の人は必要としない。二人の結婚にあって必ず必要なことは、結婚の誓いを交す時の証人として、成人イスラーム教徒二人の立会いと、その結婚を一般に公表することである。これが、イスラーム法で定められている最低限の必要とされる手続きである。しかし、これまでの慣習としては、結婚の日どりをあらかじめ公表し、結婚式には双方の友人や縁者が出席することになっている。式の形式や飾りつけは、当事者の好み通りにして、どのような形式で行ってもよいが、いづれにしても、二人の結婚はクルアーンに示されているように、神^{アッラー}によって命じられたものであることを心に念じ、自己の財力を人に誇示したり、浪費

に走ったりしてはならない。

結婚の式は、適当な集会所でいつ挙式してもよい。イスラーム法を知っている者なら、誰でも結婚の誓約交換を司会してもよい。その人はクルアーンの数節を唱え、(この場合、第一章ファーティフアと二十八章の第二二―二八節が最適である)、結婚の社会的宗教的意義、夫と妻の責任と義務を説き、そして新しく結ばれたカップルに神の祝福を祈るのである。誓約の交換には、次の言葉か、またはこれに準ずるものが良いとされている。

「新郎(新婦)、私、(名前)は、なんじ新婦(新郎)(名前)、(名前)の娘(息子)、を神のみ前、そして立合いの者の前で、クルアーンとスンナの教えに従って妻(夫)とする。私はこの結婚を神への従属の一つの行為とみなし、相互の愛情、慈愛、平和、真実および協力関係をもつことに最善の努力をすることを誓う。アッラーよ、わが証人となりたまえ。神はあらゆるものの最高の証人であられる。アーミン。」

口頭によるこの誓約の取り支わしのほかに、新郎と新婦は契約書二通にサインし、立合人のほかに少くとも二人の証人がこれにサインするものとする。イスラーム諸国では、うち一通を最寄りの裁判所に提出し、他の二通は当事者二人がそれぞれ一通づつ保持する。(わが国では、このほかに法的手続きとして役所へ婚姻届けを提出するのはもちろんである。)

夫は妻に対して、何らかの形の結婚の贈物（マフル）をすることが、クルアーンでも定められている。金銭や財物、または何かほかのかたちのこの贈物は、妻の法定財産となり、夫はどんな時でもこれに手をつけることはできない。この贈物については、次の話が伝えられている。あるとき一人の信者が預言者（かれの上に平安あれ）の所に来て「私はとても貧しくて、私の婚約者に何も与えることができません」というと、預言者は「おまえはクルアーンの章をどれか知っているか」と聞いた。男が「知っております」と答えると、預言者は「妻への贈物として、おまえの知っているクルアーンを彼女に教えなさい」と命じたのである。

ある宗教では、イトコ同志の結婚は許されていないが、イスラームでは許されている。クルアーンには、結婚を禁じられている間柄の男女について、次のように記されている。

なんじらの父が結婚したことのある女と

結婚してはならぬ。

既往のことはきわめない。

それは恥ずべく憎むべきである。

忌まわしい道である。

なんじらの禁じられる結婚は

なんじらの母・女兒・姉妹・おば・姪・乳母・乳母の姉妹・妻の母・妻の生んだ養育中の養女
―妻との性関係がないうちならよい―息子の妻である。

また同時にふたりの姉妹をめとることも禁じられている。

また夫ある女も禁じられている。

だが、なんじらの右手の所有するものは別である。

これはなんじらに対する

アツラーのおきてである。

(第四婦人章二一―二四節)

イスラーム教徒の男性は、キリスト教やユダヤ教の女と結婚することが許される。

また信者の貞節な女

ならばなんじら以前に

経典を授けられた民の中の貞節な女は

なんじらがこれに妥当の婚資を与えたとき

兩人がみだらにながれず

また秘密の情事もないとき

(結婚の相手として合法である。)

(第五食卓章五節)

2 出生

子供の誕生は祝福の時である。イスラーム教徒は、子供は神からの授りものであり、神より託されたものとみなしている。イスラーム諸国では、子供の命名は特別な事として、普通は出生の日から七日目にこれを行う。縁者や友人が両親の家に集り、クルアーンの数章を朗誦したのち、父親が子供の名前を発表し、その後で祝いの宴を催すことになっている。

預言者アブラハム(かれの上に平安あれ)の慣習に従うものは、男の子に割礼をするのがよいと、預言者ムハンマドのスンナに記されている。

出生の日から七日目、十四日目および二十一日目に子供の頭を剃り、このとき貧しい人々に喜捨

を与えることも、スンナに定められている。

3 死 亡

死は現世での生涯の終着点である。しかし、来世の存在を信じているイスラーム教徒にとって、死は人生の最終点ではなくて、ただ愛するものとの一時の別離であり、審判の日に再びよみがえり、もし神が許されるなら、再び家族とまみえることができるのである。もちろん縁者や友人の死は悲しい事ではあるが、ひどく嘆き悲しんだり、大声で泣きわめいたりしてとり乱し、過度に悲しみを表わしてはならない。このような行為は神の意志に反するものである。イスラーム教徒は人の死の知らせを受けたら、まず次のように唱える。

インナー リッラーヒ ワ インナー イライヒ ラージウーン

まことにわたしたちは

アッラーのもの

かれにわたしたちは帰るのだ。

(第二雌牛章一五六節)

親類の者や友人たちは死者の家に集って、遺族をなぐさめ、クルアーンを吟唱し、死者のため神の許しと慈悲を祈る。

聖預言者（かれの上に平安あれ）は、イスラーム教徒は死者をすみやかに埋葬せよと命じている。遺体の埋葬に当っては、死者の身体を洗い（死者が男の場合は男が、女ときは女がこれを行う）、一枚か二枚の清潔な白布で包み、担架に載せ（棺に納めるのもよい）、人の肩にかついでモスクか墓地に運び、埋葬の礼拝（サラート・アル・ジャーナーザ）を行う。この埋葬の礼拝は、イスラーム教徒の普通の務め（ファルド・キファヤ）であり、少くとも数人が加わるが、関係者全員が参加することは特に必要とされていない。埋葬の礼拝は集団で行うが、頭を深く垂れたり（ルクー）平伏（サジダ）はしないことになっている。

礼拝の最後に、平安のための挨拶（アッサラーム・アライクム・ワラハマトウッラー）をのべ、それから遺体を埋葬する。

地上にあるよろずのものは消滅する。

だが永遠に変らぬものは

尊厳と栄養に満ちたなんじの主の慈顔である。

(第五五仁慈者章 二六一—二七節)

イスラームについての諸出版物を御希望の方は、左記の諸団体へ御連絡下さい。なお毎週金曜日、東京と神戸のモスクにおいて、集会礼拝を毎の十二時半より行なっております。ふるって御参加下さい。

東京

●宗教法人 イスラミックセンター ジャパン 03(460)6169

東京都渋谷区上原3の31の11 〒151

○東京イスラーム マスジッド 03(469)0284

東京都渋谷区大山町1の19 〒151

○日本ムスリム協会 03(370)3476

東京都渋谷区代々木1の24の4 〒151

○ムスリム学生協会(日本) 03(467)3521

東京都目黒区駒場4の5の29 留学生会館 〒153

○イスラーム文化協会 03(467)2036

東京都渋谷区宮ヶ谷2の13の22 〒151

○日本イスラーム団体協議会 (代表 斉藤積平)

東京都国立市中2の22の34 〒186

○在日トルコ人協会 03(469)0804

東京都渋谷区大山町1の16

○在日インドネシア人ムスリム協会

東京都品川区東五反田2の9 インドネシア大使館気付

03(441)4201内線56

○日本イスラーム教団 03(205)1313

東京都新宿区歌舞伎町1の5の4 第六荒井ビル4F

○ユース・ムスリム・アソシエーション

東京都世田谷区太子堂5の29の16 ファミル太子堂302号

03(414)3217 イクバル・ハニーフ様方 〒154

○パキスタン協会 03(836)0193

東京都杉並区井草1の4の2 マトループ・アリ様方

横浜

○イスラーム教育情報センター 045(574)2607

横浜市鶴見区馬場2の12の10

京都

○関西ムスリム学生協会 075(641)0292

京都市伏見区深草大門町26

○日本イスラーム友愛協会 075(642)1346

京都市伏見区深草西浦町4の36 築山設計事務所 〒612

大阪

○日本回教寺院 06(363)3027

大阪市北区西天満4の6の16 三和ビル3F 〒530

神戸

○神戸イスラーム モスク 078(231)6060

神戸市中央区中山手通り2の25の14 〒650

徳島

○徳島イスラーム教育センター

徳島ハリッド学院 〒770-0886(22) 4086

徳島市西船場町1丁目 新居ビル4F

仙台

○イスラーム文化センター 02222(67)1716

仙台市片平1の2の40 清香ビル3F

金沢

○日本イスラーム青年同盟 0276(44)7019

金沢市泉木町1の7の2 泉屋書店 〒921

北海道

○北海道イスラーム協会 0144(73)2916

苫小牧市白樺町2の2の33の10 村井日出子様方

○苫小牧イスラーム ソサエティ 0144(72)5186

苫小牧市弥生2丁目3の1の711 荒井節雄様方

刊行物案内

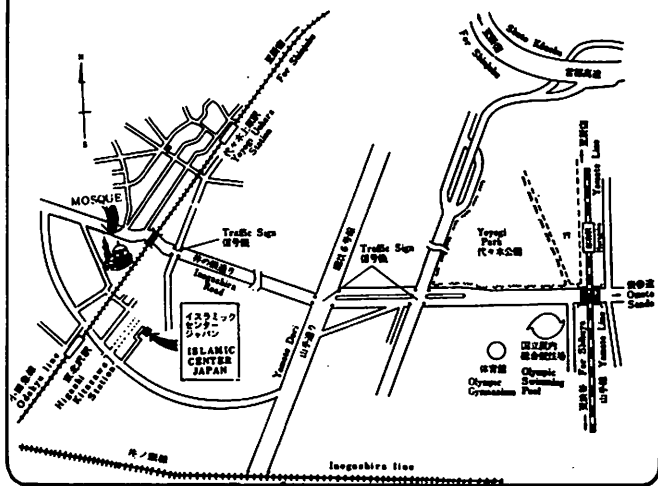
★イスラーム入門シリーズ

- 「サラート」(礼拝)①
 - 「サウム」(断食)②
 - 「ザカート」(喜捨)③
 - 「ハッジ」(巡礼)④
 - 「イスラームの生き方」⑤
 - 「ムハンマド」⑥
 - 「イスラームの家族生活」⑦
 - 「イスラームの政治理論」⑧
 - 「イスラームの休日と儀式」⑨
 - 「イスラームと女性」⑩
- ★その他の刊行物
- 「宗教は過去のものか」⑪
 - 「イスラームの教育哲学」⑫
 - 「イスラームに生まれて」⑬
 - 「イスラームと社会的責任」⑭
 - 「聖クルアーンとハディース」I、II⑮
 - 「なぜ断食をするのか」⑯
 - 「ジハード 神の道のために」⑰
 - 「預言者としてのムハンマド」⑱
 - 「神の預言者達」⑲
 - 「イスラームの子供の本」⑳

★

- 「イスラームとはなにか」⑳
 - 「イスラームの理解」㉑
 - 「文化講演会レポート」㉒
 - 「ヒジュラ・カレンダー」㉓
 - 「絶対版」㉔
- 『アッサラーム』バックナンバー
- 一～五・八号は絶版となっております。
 - 六号 「ジャーヒリヤのアラビア」
 - 「イスラーム教と仏教」
 - 七号 「ムハンマド・アリとマッコイ・タイナー」
 - 九号 「メッカ大巡礼——ハッジ」
 - 十号 「ムハンマド」
 - 十一号 「聖地エルサレム」
 - 十二号 「イスラームと他のイデオロギー」
 - 十三号 「マイノリテイ・ムスリム」
 - 十四号 「マイノリテイ・ムスリムII」
 - 十五号 「イスラーム未来への挑戦」
 - 十六号 「イスラームと人権問題」
 - 十七号 「イスラーム復興の根底を探る」
 - 十八号 「エルサレム解放に向けて」
 - 十九号 「エルサレムその現代的視点」
 - 二十号 「信教の自由」
 - 二十一号 「サハーバの時代」

Way to the Mosque and to Islamic Center Japan



聖クルアーン朗唱テープやイスラームに関する講演・討論会のテープ、その他の諸文献、並びにムスリム諸国に関するフィルムについては、当センターへお問い合わせ下さい。当センターでは、相互理解を深める為、皆様の御利用をお待ちしております。

宗 教 法 人
 発行所 イスラミックセンター， ジャパン
 所在地 東京都渋谷区上原 3-31-11
 〒 151
 TEL (03) 460-6169

هدية من :

شركة الدهلوي وكلاء ناشيونال
مكة المكرمة - المملكة العربية السعودية

謹呈

ジャミール・アル・ダハラウィーカンパニー
メッカ、 サウジアラビア

松下電器産業（株）サウジアラビア国代理店

Presented By:

AL-DAHLAWI CO., Makkah AL Mukkarama,
Agent of: Matsushita Saudi Arabia

